

多様性を育てる〜 “違い”こそ社会の原点

「違い」の辞書的意味

「違い」とは「意義素」で分類すると、①似ていない性質、②2つ数字の間の顕著なずれまたは違い、③対立しあう事実、主張、意見の間にある相違、④類似点のないことで立証された相違（引用編集 Weblio 辞書類語辞典）

「違い」とは、多角的考察

人体をレントゲンで見るか、MRIで見るか位の違いがあります。物事を「男性」だけで決めるか、「女性」・「子ども」・「障がい者」・「困窮者」からも意見を聞いて決めるかの違いがあります。

「男性」だけで決めれば、片寄った結論になります。「女性」・「子ども」・「障がい者」・「困窮者」も含めれば、多角的な結論が出ます。

民主主義は多角的考察

「自由・平等・博愛」という人類の目標を実現するには、多様な意見を聞いて多角的に考察し、行く道を誤らせないことが大事です。「違う意見に耳を傾ける」ことは、いのちの存続という目的に欠かせない手続きです。

平気で殺害

民主主義先進国であるはずの国で、『白人優位』という人造ウイルスが蔓延し、黒人を平気で殺害しています。奴隷解放宣言から150年以上たっても、この有様です。「アーリア人優位主義」のナチスとどれだけの違いがありますか？ 新選組のように、「問答無用」で殺してはいけません。

多様性（あるいは個性）を育てる

“輝かなくてよいのち”、“守らなくてよい命”などありません。「多様性（あるいは個性）」は、「人類の行く道を間違えないための安全装置」です。子どもには、「人種が違っていても人として認め合う態度」を教えなくてはなりません。いのちを守り、人類が殺し合わないための「多様性を」です。

(参考 黒人奴隷の歴史について (池田光穂))

<https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/040225Blacslave.html>

